



見捨てられた万能者は、 やがてどん底から成り上がる 1

α L P H α L I G H T

グリゴリ
Gurigori



アルファライト文庫





ケイト

「銀狼の牙」に所属する
おきなな じみ
クロードの幼馴染。
昔とは様子が
違うようだが……？

シリウス

身勝手な理由で
クロードを追出した、
Sランクパーティ
「銀狼の牙」のリーダー。

???

クロードを導く
案内人的な存在。

レイア

めす
雌のグレートキングウルフ。
オークに襲われていた
ところをクロードに
助けられた。

クロード

本作の主人公。
超器用貧乏なジョブ
「万能者」である事を理由に
パーティを追放された。

MAIN CHARACTER

登場人物紹介

第一章 Sランクパーティ追放編

ここはクリエール王国の王都クエール。王国の政治の中枢を担う極めて重要な都市であり、同時に学問と芸術に優れた人材を多く輩出する場所でもある。

そんな王都クエールの街の一角にある酒場で今、クロードという十六歳の少年が所属しているSランクパーティを追放されそうになっていた。

「俺……何かしてしまいましたか」

「いや、お前は何もやってないよ」

長い金髪を逆立てたパーティのリーダー、シリウスは、クロードを小馬鹿にしたように笑って言った。

「じゃあ何故、俺が追放されなければならないんですか」

「そんなの、決まっているじゃないか。お前が役立たずだからだよ。ケイトから、お前が今まで誰も見た事がない『万能者』というジョブを得たと聞いたから、パーティに入れてやったのに、蓋を開けてみれば、しょぼい支援魔法と荷物持ちしか出来ない。お前はこのパーティにいる資格はない」

ジョブとは十五歳を迎えた少年、少女達が洗礼の儀を受けて、神から授かるステータスの事だ。

確かにクロードは、今まで誰も見た事がない『万能者』というジョブを得た。

シリウスが言っている事はそこまでは正しい。

けれど、クロードは決して自分が役立たずだとは思っていないかった。

彼は戦闘の度に支援魔法をパーティメンバー全員にかけるのは効率が悪いと思っているので、絶えず効果が切れないように支援魔法を使用し続けている。

そのせいで、依頼中やダンジョン攻略中、魔力枯渇状態となっていたため、ろくにモンスターを倒す事が出来ずにシリウス達の荷物を持つくらいしか出来なかったのだ。

クロードが唯一経験値を得られたのは、たまに個人で受ける薬草採取の依頼で、採取中に出てくるゴブリンを倒した時くらいだった。

「俺を追放すれば、今までみんなにかけていた支援魔法が全部解けてしまうけど、それでも本当に良いんですね」

「うるせえー！俺様達は、Sランクパーティ『銀狼の牙』だ。しかも俺様達は、クリエール王国の勇者パーティメンバー候補に選ばれている。無能の荷物持ちは必要ないんだよ。既に、お前の代わりのメンバーは決まっているんだ」

シリウスはそう言うのと、一人の男をクロードの前に連れてきた。

「こいつの名前は、アレックス。主に攻撃系魔法を担当する『大魔導士』だ。どっかの無能より良い働きをしてくれるだろうぜ」

「やあ。君がこのパーティを追放された無能君かな。ここを出ていった後は、どうするのかわからないけど、精々野たれ死なないように頑張ってくれたまえ」

クロードはアレックスの物言いとその横柄な態度に腹を立てたが、言い返さず、この状況をどうにかしようと幼馴染で同じパーティメンバーのケイトに助けを求めた。

「ケイ姉も、シリウスさんに、考え直すように言ってよ」

「いや、クロード、お前は直ぐにこのパーティから出ていくべきだ。このパーティに、無能はいらない」

ケイトは、虚ろな瞳でクロードに言い放った。

「ケイトもこう言っているが、一応マルティとアイリにも聞いてみるか？」

シリウスがそう言うのと、残りのメンバーであるマルティとアイリも、ケイトと似たような目でクロードに辛辣な言葉を浴びせた。

「わたくし、クロードさんの事は、前から大嫌いでしたの。だから追放は、大賛成ですわ」

「私も……賛成」

「というわけだ。クロード……いや無能、今すぐ俺様のパーティから出ていけ。あ、鞆の

中の道具類は置いていけよ。今まで渡していた金はくれてやるよ」

シリウスはマルティとアイリの言葉に満足したのか、大笑いしながらクロードに言った。
「わかりました。今までお世話になりました」

クロードは悔しさを胸に抱きながら、酒場を出て、暗い夜道を宿泊している宿まで戻った。

パーティを追放された事で収入がほとんどなくなっていましたため、今お世話になっている宿を出て、もっと安い宿を探そうと思った。

「急いでこの荷物をまとめないと……」

部屋に戻ったクロードは数少ない荷物を鞆に詰め込むと、宿を出て、また夜道を歩き出した。

「中々良さそうな安宿が見つからないな。少し裏路地の方に入ってみるか」

裏路地に入って少し歩くと、やや古くてこぢんまりとした安そうな宿を見つけた。

クロードはとりあえずその宿に入る。

「すみません。宿泊を考えているのですが、一泊、おいくらですか」

そう尋ねると、宿の女将が答える。

「朝食、夕食付きで、二千メルだよ」

この世界には、オリハルコン金貨、ミスリル金貨、白金貨、金貨、銀貨、銅貨、鉄貨が

流通している。

オリハルコン金貨は約一億メルで、ミスリル金貨は一千万メル、白金貨は百万メル、金貨は十万メル、銀貨は一万メル、銅貨は千メル、鉄貨は百メルとなっている。

二千メルは外食すれば直ぐになくなってしまいう程の額なので、宿としては破格だった。

「それじゃあ、とりあえず一週間お願いします」

「はいよ。顔や体を拭く時は、裏にある井戸を使いな。あと、昼食は別料金で、弁当を作る事も出来るから必要な時は言いな」

「はい。じゃあ、これ代金です」

「ああ、丁度だね。これが部屋の鍵だ。部屋は、二階に上がって右の突き当たりだよ。まだ、夕食の時間だから部屋に荷物を置いたら、下りてきな」

「わかりました」

部屋はベッドと椅子、机があるだけの大変質素な雰囲気だったが、彼は満足そうに頷く。
「お、この値段の部屋にしては中々良いんじゃないか。よし、荷物も置いたし、下に夕食を食べに行くか。一体どんなメニューだろう」

クロードが階段を下りていくと、女将が声をかけてきた。

「今、ご飯運んでくるから席に座って待っていておくれ」

女将に勧められた席に座ると、とても美味しそうな匂いがしてきた。ほどなくして女将

がテーブルに置いた料理は、何かの肉のステーキと黒パン、野菜たっぷりのスープだった。「待たせたね。ゴブリンの肉のステーキとパン、スープだよ」

「あ、あの、ゴブリンの肉って美味しいんですか？ 今まで、食べた事がなかったからなんだか気になっちゃって……」

「ああ、ゴ布林肉は中々美味しいよ。ウルフ肉なんかよりよっぽど良いさあ。まあ、でも食べられる状態にするまでが大変だけどね。あんたもゴブリンの事は知っていると思うけど、あいつらはとにかく臭いからね。解体してからもその臭いは少し残ってしまうんだよ。でもね、その臭いは消す事が出来るんだ。この香草を少し使う事でね。それに、なんとって激安なのがいい」

「へえ、そうなのですか……では、いただきます」

クロードはゴ布林肉のステーキをナイフとフォークで切り分けると、口に入れて噛みしめた。

ゴ布林肉は思っていた以上に美味しく、彼はしばらくの間、言葉を発する事が出来なかった。

「なんと言うか、鶏肉みたいに淡泊な味だけど菌ごたえがあって、それに、ソースが肉の淡泊な味を補っている。黒パンも野菜の旨味と甘みが溶け出したスープに浸して食べると、食べやすくてとても美味しいです」



「そうかい。それは旦那も喜ぶよ」

クロードは女将に食事の感想を述べた後、じっくり味わって食事を楽しんだ。

「ふう、女将さん。夕食とても美味しかったです。ご馳走様でした」

「ああ、お粗末様。綺麗に食べてくれて嬉しいよ。明日の朝食は、七時から九時三十分までだからね。それまでに起きてくるんだよ」

「はい。じゃあ、お休みなさい」

「ああ、お休み」

クロードは女将に挨拶をすると、部屋へ戻った。

「さて、明日は、新しく仲間になってくれるパーティを探さないとけないな。見つかるの良いのだけど」

食堂から戻ってきた後、部屋のベッドに横になりながら、明日の行動について考えつつ目を閉じた。

しばらく経つと、見覚えのある家の近くにいた。

ギィ〜。

いきなりの事で困惑していると、急に戸が開いた音がした。

クロードが戸の方を見ると、そこから小さな女の子と男の子が出てきた。

「あれは……小さい頃の俺とケイ姉？ ……そうか、ここは夢の中なのか」

小さい自分とケイ姉の方を見ていると、二人は、村の空き地で一緒に遊び始める。ふと、二人の会話が聞こえてきた。

「ねえ、ケイ姉、俺、好きな子が出来たんだ。誰だかわかる？」

「え……そ、そうなの、良かったね。その子の事を大切にして、守ってあげるのよ」得意げに尋ねる小さいクロードに、ケイ姉は答えた。

しかし、彼女は浮かない顔をしている。

それに気付かない小さいクロードは、あっけらかんとしながら言い放つ。

「うん。俺、ケイ姉の事を守るよ。物凄く大切にするよ」

「え、好きな子って、私の事だったの？」

「そうだよ。俺が好きなのは、ケイ姉だけだよ」

小さいクロードがそう言うと、ケイ姉は嬉しかったのか号泣してしまった。

そんな彼女の背中を小さいクロードが、一生懸命にさすっていた。

「ねえ、ケイ姉、大きくなったら……俺と結婚してくれる？」

その問いを聞いたケイ姉は、口をあんぐりと開けたまましばらく固まっていた。しばらくして彼女は、一言――

『うん』

そう答えた。

彼女の顔はとても赤い。

クロードは微笑ましい気持ちになりながら、小さい頃の思い出に浸るのであった。

「おーい、あんた。早く起きな。朝食の時間が終わっちゃうよ」

誰かが部屋の戸をドンドンと叩きながら何か言っている。

「ん、はい……今、行きます」

「そうかい、準備しておくから、さっさと下りてきなよ」

「はい」

ベッドから起き上がったクロードは、直ぐに着替えて一階の食堂に下りた。

「女将さん。さっきは、起こしてくれてありがとうございます。もう少しで、朝食を食いっぱぐれるところでした」

「そんな事は気にしないで良いよ。それより、先に井戸に行って顔を洗っておいで。ご飯の方は、作っておくから」

「はい。じゃあ、お願いします」

クロードが井戸で顔を洗い、食堂へ戻ってくると、女将の旦那が丁度朝食を作り終えた

ところだった。

「女将さん。今、戻りました」

「ああ、こつちも出来上がったところだよ。今、テーブルに運ぶから席に座って待っていておくれ」

「はい」

女将に言われた通りに席に座ると、ややあつて女将が朝食を持ってきた。

「待たせたね。今日は、ハムエッグとキャベツのサラダと黒パンに野菜のスープね。それじゃあ、ごゆっくり」

クロードは早速ハムエッグにはしを伸ばす。

「お、このハムエッグ、黄身が半熟で美味しいな……旦那さんの料理の腕は確かだな」
絶品の朝食を美味しくいただくと、女将に声をかける。

「女将さん。ご馳走様でした。朝食、美味しかったです。夕食もよろしくお願いします」

「ああ、お粗末様。旦那にも言っておくよ。それで、今日のあなたの予定は決まっているのかい」

「はい。俺、パーティを追放されて、今一人なので、まずはギルドに行って新しく仲間にくれるパーティを探してみるつもりです」

「そうかい、新しいパーティが見つかるの良いね。頑張るんだよ」

朝食を食べ終わったクロードは、その後、身だしなみを整えてからギルドに向かった。

宿を出たクロードは、今、冒険者ギルドの前にいる。

「さてと、まずは、受付に行ってパーティ加入希望申請を出すか」

受付に出来ている列に並ぶ事三十分、クロードの番がやって来た。

「はい。次の方、ご用件はなんでしょうか」

「えっと、新しく入れるパーティを探したいのですが、お願い出来ますか」

「はい。わかりました。では、この申請書に必要事項を書いてください」

「はい……書き終わりました」

「確かに。ではこの申請書は、パーティ加入希望者ボードの方に張らせていただきます。加入の打診がありましたら、こちらからお声がけさせていただきますので、それまでは、ソロでの活動をお願いいたします」

続けた。

いつまで経っても打診がない事に、クロードは焦りを感じていた。

今日も薬草採取の依頼をこなしつつ、はぐれのモンスターを討伐しに新緑の森という場所の浅層に来ていた。

「はあ、結局今日も加入の打診はなかったな。打診が来るまで、根気強く依頼をこなし続けるしかないか。さてと、薬草でも探しますか」

その後もこつこつと薬草を見つけては採り、たまに出てきたゴブリンやウルフを倒すという作業を繰り返す。

しかし採取に夢中になるあまり、いつの間にか森の中層近くまで来てしまった。

「少し森の様子が変わってきたな。もう依頼分の薬草は採取し終わっているし、王都に帰ろう」

そんな事を考えていたクロードの背後から、パキッという音がした。

咄嗟に振り返ると、そこには、Cランクの猪モンスター、キラーボアの獐犇な顔があった。

「な、なんで中層にいるはずのキラーボアがここに……中層に近いとはいえ、まだ浅層だぞ」

クロードは、死ぬかもしれないという絶望感を覚えながら、必死でこの窮地をどうよう

に脱^{だつ}するか考える。

「支援魔法を全力でかけたとしても、俺の足でキラーボアから逃げきる事は出来ないな」
 そう呟^{つぶや}いたクロードは、キラーボアと戦う事を決意した。

覚悟を決めて自分にありったけの支援魔法をかける。

「筋力上昇、腕力上昇、俊敏^{しゅんびん}上昇、攻撃力上昇、防御力上昇……よし、今自分に出来る支援魔法はかけた。あとは、キラーボアに勝つだけだな」

剣を抜き、正眼^{せいがん}に構えてキラーボアと対峙^{たいじ}する。

一瞬の後、キラーボアが突進してきた。

クロードは、キラーボアの突進や踏みつけ、巨大な牙^{きば}による薙ぎ払いなどの攻撃を防具を破損^{はそん}させながら、必死に避け続ける。

「はっ、はっ……一体どうすればいいんだ」

こちらの攻撃は全く当たらず、キラーボアはまだまだびんびんしていた。

「このまま戦っても殺されるだけだろうな」

その時、クロードはある事に気が付いた。

「……ん、そういうえばここは、中層に近い場所だったな。浅層と中層の間には、谷があったはず……そこまでキラーボアを誘導して、谷に落とす事なら出来るかも。ここで戦い続けるより勝機がありそうだし、やってみるか」

そう決めたクロードは、早速行動を起こし、数十分かけてキラーボアを谷まで誘導する事に成功した。

「よし、あとは、こいつを俺の懷^{かこ}まで誘い込んで、突進してきたところをギリギリで避ければ……」

谷に着いたクロードは、避けたり逃げ回ったりするのをやめて、谷を背にしてキラーボアと真正面^{まじょうめん}から向き合い、突進してくるのを待った。

中々仕掛けないクロードに痺^{しび}れを切らし、キラーボアはクロードに向かって駆^かけた。

キラーボアと接触^{せつしよく}するかしないかのギリギリのタイミングを狙^{ねら}って、クロードは横に飛ぶ。

しかし、避けた瞬間にキラーボアが頭を振り、牙が防具に引っかかった。

「あ、ああああ!!」

物凄い力で引っ張られる感覚を覚えた次の瞬間、クロードが見た光景は、キラーボアと一緒に落ちている自分を映したキラーボアの眼だった。

腕力上昇と筋力上昇の支援魔法をかけ直し、剣を岩肌^{いば}に突き刺して、落下阻止^{そしこど}を試みる。

「……危なかった」

なんとか落下を阻止したクロードは、そのまま落ちていくキラーボアを見た後、数分かけて崖^{がけ}を登った。

「はあ、疲れた。なんとか倒せたけど、死ぬかと思った……さっさと帰って寝たい」

谷から生還したクロードは、その場で少し休憩した後、王都クエールに帰還し、ギルドへ依頼完了の報告をしに行った。

「すみません。依頼の達成報告にきました」

「はい。薬草十束ですね……確認しました。こちら報酬です。どうぞお受け取りください。それで、そのボロボロの防具は、どうしたのですか」

「ああ、これですか……薬草を採取していたら中層近くまで行っていたみたいで、キラボーアに遭遇しまして……その時に破損しました。あ、あとモンスターの魔石の買取をお願いします」

「よく逃げられましたね……買取は、買取カウンターの方でお願いしますね」

「いえ、逃げたのではなく、倒したんですよ。まあ、谷に落としたんですけどね」

「そ、そうのですか」

「ええ、じゃあ、また明日」

受付カウンターを離れて買取カウンターに向かおうとすると、後ろの方で冒険者達が「今の話、絶対嘘だな」とこそ言い合う声が聞こえてきた。

クロードは、気にせず買取カウンターに足を向けた。

「買取をお願いします」

「おう、獲物を出してくれ」

クロードは、言われた通りにゴブリン二体の魔石を出した。魔石とはモンスターの心臓のようなもので、討伐の証明になる。

「これだと、この金額で買い取るぞ」

「お願いします」

提示された金額に領いてお金を受け取った後、大手の防具屋で今まで使っていた物と同じレッサーウルフの皮鎧を購入してから宿に戻った。

「お、お帰り」

「女将さん、戻りました。少し疲れましたので、夕食の時間まで寝かせていただきます」

「はいよ。夕食の時間には起こしに行つてやるからね」

「お願いします」

その後、案の定女将に起こしてもらったクロードは夕食を食べ、また直ぐに眠りに就いた。

『スペシャルジョブ』『万能者』のレベルがMAXになりました。それによりスペシャルジョブ『万能者』が、オリジンジョブ『超越者』に進化しました。進化により、ジョブの

レベルが1になりました」

- 【なお、スペシャルジョブ『万能者』はユニークスキル『万能者』へ生まれ変わりました】
- 【ユニークスキル『全属性魔法』を獲得しました】
- 【アルティメットスキル『創造』を獲得しました】
- 【アルティメットスキル『全知』を獲得しました】

翌日からクロードは今までと何も変わらず、薬草採取の依頼を受けて、はぐれのゴブリンやウルフを狩る生活を続けた。

だが、その間、いくら待ってもパーティ加入の打診が来る事はなかった。

「すみません。パーティ加入の打診はまだ来ませんか」

クロードが痺れを切らして、ギルドの受付に直接聞きに行くところ……

「ああ、クロードさんですか。まだ、来ていませんね……あの、失礼を承知で言わせていただきますと、クロードさんはキラীবオアの件で、他の冒険者の方達から疑いの目で見られているみたいでして……誘いに来る方はもしかしたらいらつしやらないかもしれません。なので、ソロで活動するか、他の街に行つて、改めてパーティ加入申請をしてみてもどう

でしょうか」

「……そうですね。少し考えようと思います。今日は、これで失礼します」

宿泊している宿に帰ると、女将がクロードを迎えた。

「お、帰ってきたね。それで、今日はどうだったんだい。パーティには入れたのかい」

「ああ、女将さん。その事なんですけど……今日、受付のお姉さんに『誘いに来る方はもしかしたらいらつしやらないかもしれません』って言われちゃいました。ソロで活動するか、他の街に行つた方がいって。とはいえ、まだここには泊まるつもりなので、とりあえず一週間、宿泊延長でお願いします。これ、延長料金です」

「ああ、確かに、丁度だね。夕食の時間まで大分あるけど、どうするんだい」

「そうですね。とりあえずその辺をぶらぶらして、今後の事について考えてこようと思います。夕食の時間までには帰ってきますので。では、行ってきます」

クロードはそう言つて、王都の街へ繰り出した。

夕方、悶々とした気持ちを抱えながら宿に帰ってきたクロードが部屋に戻つて数十分後、ようやく今後の方針を決めたところで女将が扉をノックした。

「もう直ぐ夕食の時間が終わっちゃうから、食堂に下りておいで」

「え、ああ、わかりました。考え事をしている間に、もう夕食の時間になっていたのか……早く美味しくて温かいご飯を食べて気分転換しよう」

クロードが食堂に行くと、女将が笑みを浮かべた。

「お、下りてきたね。他のお客さんはもう食べ終わって、各自の部屋に戻ったから、ゆくり食べられるよ。さあ、席に座って待っている。今、料理を持っていくからね」

クロードが大人しく待っていると、今日は女将だけでなくその旦那も一緒に料理を持って現れた。

二人でクロードの前に料理を並べると、女将が口を開く。

「あんた……えっと、名前はなんて言ったかね」

「え、ああ、クロードです」

「クロードはこれからどうするか、決められたのかい？ まだ、決められていないなら、私らで話くらいは聞いてやるけど」

「ああ、その事なら、先程無事に決めました。俺は、しばらくの間、ソロで冒険者活動をしようと思います」

「そうかい、決めたのかい。じゃあ、今日は、冒険者クロードの新たな門出だね。奮発してオーク肉を用意しておいて良かったよ。今、旦那がオーク肉のステーキを持ってくるからちょっと待っている」

いったん厨房に戻った旦那が、ステーキを持ってきた。

「召し上がれ」

それだけ言うと、旦那は再び厨房に引込んでしまった。

「はあ、すまないね。うちの旦那は料理の腕も良いし優しい人なのだけれど、無口でね。人と話すのが、苦手みたいなんだよね。悪く思わないであげてくれ」

「大丈夫ですよ。俺はそういうの気にしないで、じゃあ、いただきます」

クロードはステーキを口に運ぶと、目を見開く。

「おお……ゴブリンのステーキも美味かったけれど、やっぱりオーク肉は脂ののりが違うな。最近は全く食べていなかったから、オーク肉の旨味が染みる……」

夕食を美味しくいただいたクロードは、女将に声をかける。

「ご馳走様でした。オーク肉のステーキ、とても美味しかったです。勿論、その他の料理も。これで、明日からの冒険者活動に向けて英気を養う事が出来ました。じゃあ、今日はもう寝るので、お休みなさい」

「ああ、お休み」

翌日、クロードは、日の出と共に目を覚ました。

「さて、今日から本格的なソロ冒険者だ。ランクを上げないといけないから、薬草採取とゴブリンかウルフ討伐の常時依頼でポイントを稼ぐか。とにかく、まずは朝食だな」

クロードは一階に下りて、井戸で顔を洗ってから朝食を食べた。

「クロード、これからギルドに行くのかい」

「はい、女将さん。今日がソロ冒険者としての第一歩なので、頑張ってください」

「頑張るのは良いけれど、無理だけはするんじゃないよ。これ、サービスの昼の弁当だよ。持っていきな」

「ありがとうございます。それじゃあ、行ってきます」

「ああ、行つてきな」

こうして、クロードはギルドに向かった。

ギルドに到着して中に入ると、朝一番で依頼を受ける者が多いためか、受付カウンターには長い行列が出来ていた。

クロードは、比較的人数の少ない列の最後尾に並ぶ。どうやらここは、いつも対応してくれる受付嬢の列らしい。

それからしばらくして、クロードの番がやって来た。

「はい。次の方どうぞ。ご用件は……あ、クロードさんじゃないですか。今後、どのように活動していくかお決めになられたのですか」

「はい。しばらくの間、ソロで活動する事にしました」

「そうですか。わかりました。そのように手続きしておきます。それで、少々お聞きしたい事があるのですが、よろしいですか」

「はい。なんででしょうか」

「パーティ追放時のステータスボードには、ジョブが荷物持ちと書いてあるのですが、これは本当ですか？」

「あ、いいえ、俺のジョブは『万能者』です」

「え、そうなのですか」

受付嬢はカウンターの後ろにある棚から分厚い本を取り出すと、何かを調べ始めた。

「『万能者』というジョブは確認出来ません。クロードさんだけのオリジナルですね。

ジョブの性質がはっきりしていないと、報酬や難度が高い指名依頼の斡旋が難しいです。なので、ランクが上がるのが、普通の人より幾分か遅くなってしまう可能性があります」

「そういえば、パーティに入る時、リーダーにジョブ欄には荷物持ちと書いておけると言われて書いたので、正式なものではないかもしれませんが。ギルドカードの更新もギルドに加入して以来してないし、やっておいた方がいいですよね」

「そうでしたか。では、鑑定水晶かんていすいしょうを使ってカードの更新をしてしまいました。さあ、水晶の上に手を置いてください」

「あの、その鑑定水晶とはなんですか。使った事がないので、説明をしていただけるとありがたいのですが……」

「ええええ!? 鑑定水晶を使った事がないとは本当ですか。それはおかしいですよ。皆さんギルドに加入する時は、必ずやる事なのですから。あ、クロードさんが以前所属していたパーティは、『銀狼の牙』でしたね。なら、そのような事もありえそうです」

そう言いながら受付嬢は、クロードを憐れみの目で見た。その実力に反して、『銀狼の牙』の評判はギルド内でもよくないらしい。

「くそっ……シリウスの奴、俺のギルド加入の時、色々手順を省きやがったな」

「え、どうかしましたか?」

クロードが誰にも聞こえないような小声で愚痴を言っていると、受付嬢が尋ねた。

「いいえ、なんでもありません」

「そうですか。では、とりあえず、水晶でギルドカードを更新しましょう」

「はい。よろしくお願いします」

クロードは、水晶の上に手を載せた。

結果は……

「ク、クロードさん、ジョ、ジョブが変わっていますー」

「はあ? ジョ、ジョブが変わっているって……一体どのようなジョブに変わったのですか」

「え、えっと、ですね。『超越者』というジョブになっていますね。これも全く聞いた事がない、未知のジョブですが」

「未知のジョブ、ですか……」

「お役に立てず申し訳ございません。私の方でも調べてみようと思いますので、何かわかりましたらご連絡いたします。私の名前はミレイです。覚えておいてください。あとは教会に行って『超越者』のジョブについて鑑定してもらえば、何かわかるかもしれません。

それと、念のためギルドのルールをもう一度説明しようと思うのですが、お聞きになりますか」

「はい。聞いておこうと思います」

「わかりました。まず、ギルドのランクは上から、EX、SSS、SS、S、A、B、C、D、E、F、Gとなります。冒険者は、原則として自分のランクと一つ上のランクの依頼を受ける事が出来ます。例外もありますが。次に、依頼に失敗したら違約金が発生します。依頼によって金額はまちまちです」

ミレイはそこまで言うと、一息ついてからまた口を開く。

「ギルドカードを持っている時にステータスと唱^{とな}えると、自分のステータスを見る事が出来ます。また、緊急^{きんぎゅう}依頼が発生すると、ギルドの近くにいる冒険者のギルドカードが強く光りますので、Dランク以上の方は、ギルドに集まっていたく事になっております。失^なくしてしまわれますと再発行に銀貨五枚かかりますので、気をつけてください。説明は以上となります。何か質問などはありますでしょうか」

（今の俺のランクは、Fランクだからシリウス達を見返すには、現時点の彼らのランクと同じSランクまでは上がらないといけないな。まあ、地道に依頼をこなしてランクを上げられないか）

クロードは今後の目標を頭で確認し、ミレイに答える。

「大丈夫です。説明して下さり、ありがとうございます、ミレイさん。暇^{ひま}が出来たら直ぐに教会に行ってみようと思います。それじゃあ、早速この二つの依頼を受けたいのですが」

「えっと、薬草採取とゴ布林十体討伐の常時依頼ですね。はい、受理いたします。場所は新緑の森ですね。あまり奥に入ってしまうと強いモンスターが出てきますから、十分注意してください」

「はい。では、行ってきます」

依頼を受けたクロードは、新緑の森の入り口付近に来ていた。

以前キラーボアに出会った新緑の森は、王都クエールから馬車で一時間ほどの場所であり、主にEランクからBランクのモンスターが生息している。

森の奥に入れば入るほどモンスターのランクが上がる、見習い冒険者や中堅^{ちゅうけん}冒険者が挑^{いど}む森である。

ちなみに、王都クエールを挟^{はさ}んで反対側に死の森というところがあり、そこでは主にCランクからSSSランクのモンスターが生息する。噂^{うわさ}によると、死の森の中心近くにはEXランクのモンスターまでいるらしい。

「さて、薬草採取はともかくとして、ゴ布林は、ノルマの十体よりも多く倒したいな。魔石が多少なりともお金になるし、稼^とがないと良い装備も整えられない。あとは、新しいジョブの能力を試さないといけないし……やる事がたくさんあるな」

まずクロードは、森の入り口付近で薬草の採取を行った。

「確か薬草は十本採取で良かったよな。んゝ参ったな。あと四本なんだけど、この辺りにはもう見当たらない。もう少し奥に入ってみるか」

森の奥の方に進んでいくと、薬草の群生地^{ぐんせいち}を発見した。

「お、薬草がいっぱい生^はえているところがあるぞ。これで、採取依頼のノルマは達成出来たな。次はゴブリンの討伐か。とりあえず一体探そう」

一時間ほどで、クロードはゴプリンを五体見つけて倒した。残りの五体をクリアするため、再びゴプリンを探し始めると、木々の間から村のようなものが見えた。

クロードは念のため近くの茂みに隠れて、様子を窺う。

「あ、あれは、ゴプリンの村じゃないか!? 見えるだけでも百体はいる……とにかく、敵の正確な総数を知りたいな。新しいジョブの力を試してみるか」

森に来る途中、クロードはステータスを確認して、ジョブによって身についたスキルがある程度把握していた。

具体的に何が出来たのかまでは理解していなかったものの、なんとなく意識をゴプリンの村に向けて集中すると、少しずつゴプリンの気配を察知出来るようになってきた。それからしばらくすると、ゴプリンの村にいる全てのゴプリンの気配を捉えた。

【スキル『気配探知』を獲得しました】

「んん、なんだ? 今、頭の中に声が響いたような……まあ良いか。それにしても、マジかよ。ゴプリンの総数、百五十体を超えているじゃないか。しかも上位種やキングまでい

るし……よし、せっかくの機会だし、魔法の試し撃ちに付き合ってもらおう。そうと決まれば、賢者のアイリが得意だった上級魔法を……って、俺は上級魔法を使えるのかな」これまで常に魔力枯渇状態だったクロードは、そもそも自分に魔法が使えるのかどうかわからなかった。

彼が悩んでいると、さっき聞こえた謎の声とはまた違った声が聞こえてくる。

【今のあなたの魔力量であれば、上級魔法は容易に使う事が出来ます。まあ、コントロールは最悪ですが。あ、あと『超越者』の能力により、あなたはあらゆるスキル、能力を習得しやすくなっています】

「何か謎の声が非常に重要な事を言っている気がするが、まあ良い。よし、必要な魔力は溜まったな。目標を定めて……上級魔法『サイクロン』発動」

ゴゴゴゴゴゴ!!! バキバキ!!!!

轟音と共に、竜巻がゴプリンの村に向かっていく。

【風魔法を習得しました。スキル『全属性魔法』に統合されました】

「また声がした……今度は最初の声だな。これは幻聴なのか? それにしても『サイクロン』は想像以上だな。上級魔法ってこんなに威力が強いのか」

クロードが放ったサイクロンが村を通過して消失した後には、粉々になった村の建物とゴ布林達の亡骸が転がっていた。

しかし、その惨状の中で、まだ立っている者達がいた。

「あれだけの猛威の魔法に晒されて生きている奴がいるのか。凄く頑丈だな」

そこでは、瀕死の重傷ながらもなんとか立っているゴブリンの上位種——ゴブリンジェネラル四体と、彼らに守られたこの集落の王——ゴ布林キングが怒りの形相を浮かべていた。

「なんだよ。まだ五体も生き残っているじゃないか。はあ、まず先に、瀕死のゴ布林ジェネラル四体を倒すか。ゴ布林キングはその後だな。魔石まで焼けちゃうのは少し惜しいけど、魔法で一気に倒すか。『サイクロン』を撃つ事が出来たんだ。中級魔法の『ファイアウェーブ』も大丈夫だろう」

魔力を練って、中級魔法『ファイアウェーブ』を放った。

【魔法を習得しました。スキル『全属性魔法』に統合されました】

クロードが『ファイアウェーブ』を放つと、ゴ布林ジェネラル達はあつという間に消し炭になった。

「おお、中級魔法でこれなのか。さっき魔法使わなくて良かった。さて、残るはゴ布林キングだけど、相も変わらず睨みつけてきているな。魔法は風と火を使える事がわかったし、なんとなくそれ以外の属性の魔法も使える気がするから、今度は接近戦で戦ってみるかな」

接近戦に持ち込むため、ゴ布林キングを牽制しながら『銀狼の牙』に加入した時から使っているアイアンソードを抜いた。

「ゴ布林キング相手に俺の剣術がどこまで通じるかわからないけど、『超越者』としての基本的な身体能力も把握しておきたいし、とりあえずやってみよう」

ゴ布林キングに向かって駆け出したクロードは、力の限り剣を振ったが、ゴ布林キングはいとも容易くそれを避けた。

【スキル『下級剣術』を獲得しました】

謎の声を無視して、身体能力上昇、攻撃力上昇、防御力上昇の支援魔法を自分に向け、再び駆ける。

「行くぞ！ 勝負だ！」

クロードは剣を振りかぶって、ゴ布林キングに飛びかかった。

しかし、ゴ布林キングの肩に当たった鉄の剣は、真ん中から綺麗に折れてしまう。
「な、マジかよ。俺の唯一の武器だったのに……しようがない、格闘術しかないか。なら、いつもシリウスにかけていた身体強化魔法を試そう」

先程自分にかけてた身体能力上昇、攻撃力上昇、防御力上昇の支援魔法の上位互換——身体能力超上昇、攻撃力超上昇、防御力超上昇の支援魔法を発動する。

クロードは拳を力強く握りしめて、ゴ布林キングに顔を向けた。

「おお、力が漲ってくるな。これならいけるかも。まずは、ストレートの連打をお見舞いしてやるよ」

【スキル『下級体術』を獲得しました】

ゴキー！ バキー！ ゴン！

クロードの連打がさく裂し、膝を地につけてダウンするゴ布林キング。クロードは一度距離を取った。

「よし、効いているみたいだな。なら今度は、普通の連打じゃなくて手足に属性魔法を付与した状態で攻撃してみよう」

そう呟くと、両手に火属性を、両足に風属性をそれぞれ付与した。

【付与魔法を習得しました】

「お、やってみると案外上手いくものだな。よし、戦闘再開だ。覚悟しろよ、ゴ布林キング。経験値として俺の糧になってもらうぞ」

「グオオオオオオオオー！！」

「お、そっちも気合十分みたいだな。俺も負けてられない」

クロードも雄叫びを上げながら、ゴ布林キングに向かった。

そこからの攻防は、クロードが圧倒的な力で有利に進めた。

【火拳』『風脚』『ファイアトルネードアップー！』

【スキル『魔闘術』を獲得しました】

最後の技を決めた後、ゴ布林キングは、力なく地面に倒れた。

クロードは、ゴ布林キングが死んだのかどうかを確かめるため、横たわった体に近づく。

「どうやら無事に倒す事が出来たみたいだな。中々ハードな戦いだったけど、俺自身の戦

闘スタイルの確認とか、魔法の練習が出来てとても有意義だった。さて、ゴブリンを倒しすぎてしまったが、受けた依頼も達成出来たし、クエールに戻ってギルドに報告に行きますか」

そこで、最初の方に頭に響いた謎の声と、戦闘中も絶え間なく鳴っていたアナウンスについて考える。

「それにしても謎の言う通り、本当に色んなスキルを習得出来たな。しかし、なんだあの声は？ まあ今考えても仕方ないんだが……」

クロードは倒したゴブリンやゴブリンジェネラル、ゴブリンキングの素材を時空間魔法で作り出したアイテムボックスに収納し、クエールへの帰路に就いた。

クエールの門の前までやって来たクロードは、列の最後尾に並んで順番が来るのを待った。

ややあつて、クロードの番になると、彼はギルドカードを見せて街に入り、ギルドに向かった。

「さてと、ミレイさんの列は、お、あまり混んでないなあ。よし、このまま並ぼう」

順番が回つてくると、ミレイはクロードに気付く。

「あら、クロードさん。帰りが遅かったので心配していたのですよ。何かあったので

すか」

クロードは、ミレイにゴブリンの村の事を話した。

「な、新緑の森にゴブリンの村が……これは、一大事です。早く対策会議を開いて、対処しなければ。クロードさん、貴重な情報を教えていただき、ありがとうございます。私は、ギルドマスターにこの事を伝えなければなりませんので、依頼達成の手続きは他の者が対応します。では、失礼します」

ミレイがカウンターを離れようとしたので、クロードは慌てて補足説明をした。

「いえ、もうゴブリンの村は殲滅してきましたので、問題ありませんよ」

「え、ク、クロードさんが殲滅したのですか!? どのように倒したのですか？ 村にいたゴブリンの数はどのくらいだったのですか？ 教えてください……いえ、教えない！」

ミレイが物凄い目つきでクロードに迫るので、彼はたじたじになる。

「え、えっと、まず、村には百五十体くらいのゴブリンがいました。うち、ゴブリンキング一体、ゴブリンジェネラル四体を含む上位種が、大体五十体、残りの百体近くは普通のゴブリンでした。俺は魔法を使ったり、手足に魔法を付与して戦う魔闘術で戦ったりして、殲滅しました。経緯は以上です」

「そ、そうですか……それでは、何か証明出来る部位はありますか。ありましたらご提示をお願いします」

「証明部位はあるのですが、とにかく量が多いので、倉庫のようなところで確認していた
だけとありがたいのですが……」

「わかりました。では、こちらへどうぞ」

クロードは、ミレイに倉庫まで案内された。

「では、こちらに素材を出してください」

「わかりました」

ミレイに素材を出すように言われた倉庫は、そこそこ大きかった。

クロードは、アイテムボックスを展開して、中に入っている素材をどさどさ外に出していく。

その時のミレイは、目が飛び出しそうなほど驚いた顔をしていた。

「その、クロードさん。申し訳ありませんが、さっきの話をギルド長室でギルドマスターに話していただけませんか」

「良いですよ」

「ありがとうございます。では、いったん素材を仕舞って、私に付いてきてください」

ミレイに連れられてやって来たギルド長室には、ひと際立派な扉がしつらえられていた。
その扉をミレイがコンコンとノックする。

立ち読みサンプル はここまで

「ギルドマスター、ミレイです。少々報告したい事がありまして、クロードさんをお連れ
したので、お時間よろしいでしょうか」

「ああ、大丈夫だ。入りなさい」

「失礼いたします」

中に入ると、頭上の毛が薄い四十代半ばから後半くらいのギルドマスターと思しき男が、
立派な椅子に座って大量の書類と格闘していた。

「おお、もう少しで一段落するから、少しソファに座って待っていてくれたまえ。ミレ
イ君は、業務に戻っていい」

「はい、わかりました。クロードさん、先程、私に話した事をそのままお伝えしてくだ
さい」

クロードがソファに座ると、ミレイはそう言って、紅茶とクッキーを用意した後、ギ
ルドマスターと何やらこそ話合って部屋を出ていった。

紅茶とクッキーを食べていると、書類仕事が落ち着いたようで、ギルドマスターが向か
いのソファに座った。

「やあ、待たせてしまったね。それで、どのような報告か聞かせてくれるかな」

クロードは受付カウンターでミレイに話した内容を、改めてギルドマスターに説明した。
話が進むにつれて、徐々にギルドマスターの顔色が悪くなっていった。